

## 第一章 章番号1 章内番号1～5 通し番号1～5

## 本文訳

言うことのできる道は久しく続く道でない。名づけることができる名は久しく続く名でない。名のない所から天地が始まる。天地が万物の母になる。常に、無は微の極である妙を見ようとする。常に、有はその帰する所を見ようとする。無と有は同じものから出て来るが、名称は異なっている。その同じものを玄と言う。同じものは玄と名づけているが、さらに玄であり、多くの妙（微の極）の門である。

## 通し番号1 章内番号1 識別番号1・1

## 本文

## 1 道可道、2 非常道、3 名可名、4 非常名、

1 dào kě dào, 2 fēi cháng dào, 3 míng kě míng, 4 fēi cháng míng,

道の道<sup>(2)</sup>うべきは、常<sup>(3)</sup>の道に非ず、名<sup>(1)</sup>の名づくべきは、常の名に非ず、

(1)道<sup>(1)</sup>う…言う 現代日本語で「報道」と使う。報道の「道」は「言う」の意味で使っている。「みち」の意味でない。現代でも道を「言う」の意味に使う用法は残っているのである。 道、言也道、言なり（孟子朱注35・1） 仲尼之徒、無道桓文之事者（仲

尼の徒、桓文の事を道<sup>(1)</sup>う者無し）（孟子35・2）  
(2)道の道<sup>(1)</sup>うべきは、常の道に非ず…ここは「道の道とすべきは常の道に非ず」と読むのが定説である。老子の説く道は道とすることができている。「道の道とすべきは常の道に非ず」と言うなら、老子の道も常の道でないことになってしまう。太田晴軒は「道」は「従う」「由る」だとする。しかし老子の道は無為自然に従い由っている。「従い由ることのできるものは常の道でない」と言うなら、老子の道も常の道でないことになってしまう。一方「道は言うことができないう」というのは老子の言う道の特徴であり、

『老子』の他の箇所でも述べられている。 行不言之教（不言の教えを行う）（老子8・1） 有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立不改、周行而不殆、可以為天下母、吾不知其名、字之曰道、強為之名、曰大（物有りて混成たり、天地に先だちて生ず、寂たり寥たり、独り立ちて改わらず、周行して殆うからず、以て天下の母と為るべし、吾其名を知らず、之に字して道と曰う、強いて之が名を為して、大と曰う）（老子25・1）  
不言之教、無為之益、天下希及之（不言の教え、無為の益は、天下之に及ぶこと希なり）（老子22・2） 不言而善應（言わずして善く応ず）（老子39・8） またこの章の終わりでは、始と母、名無しと名有る、無と有が出てくるものを玄と名づけている、この玄は道とほぼ同じ意味である。王弼は「玄者、冥也、默然無有也、始母之所出也、不可得而名、故不可言、同名曰玄、而言謂之玄者、取於不可得而謂之然也」（玄は、冥なり、默然として有ること無きなり、始母の出る所なり、得て名づくるべからず、故に言うべからず、同じく名づけて玄と曰う、之を玄と謂うと言うは、得て之を然りと謂うべからざるに取るなり）（老子王弼注5・9）と注釈しており、玄、つまり道は言うことができないし名づけることができないと言っている。だから言うことのできるものは道でないのである。王弼も「道」を「道<sup>(1)</sup>う」と読んでいる。

(3) 常…久しい 常者久也 (常は久なり) (范應元) 知和曰常 (和を知るを常と曰う) (老子285.2)

王弼注

1 可道之道、2 可名之名、3 指事造形、4 非其常也、5 故不可道、6 不可名也、

1 kě dào zhī dào, 2 kě míng zhī míng, 3 zhǐ shì zào xíng, 4 fēi qí cháng yě, 5 gù bù kě dào, 6 bù kě míng yě,

道うべきの道、名づくべきの名は、事を指し形を造り、其常に非ざるなり、故に道うべからず、名づくべからざるなり、

王弼注記

言うことのできる道、名づけることができる名は、事を指し形を作り久しく続くものでない。だから言うことができないし、名づけることができない。

私たちの社会は言葉を重んじる社会である。テレビ、新聞、書物、YouTube、SNS (Social Networking Service) など、人々は多くの言葉を発している。言葉で真理を言うことができるのだと思っているから人々は言葉を発信しているのである。しかし言葉は人間が生まれた時から持っているものでない。生後周囲の人が話していることから習得したものである。日本語

が話されている環境で育てば日本語を話すようになる。英語が話されている環境で育てば英語を話すようになる。言葉は自分が育った環境によって得たものである。育つ環境により話す言葉が違ってくる。人間に本来備わるものが環境により変わるとは考えにくい。だから言葉は人間に本質的なものでない。本質的なものでない言葉で本質的な道を表すことができるとは考えにくい。道は言葉を超えたものである。だから言葉で言うことのできる道は真の道でないことになる。

通し番号2 章内番号2 識別番号1・2

本文

1 無名天地之始、2 有名萬物之母、

1 wú míng tiān dì zhī shǐ, 2 yǒu míng wàn wù zhī mǔ, 名無きは天地の始めなり、名有るは万物の母なり、

(1) 名有る…天地 有名者、天地是也 (名有るは、天地是れなり) (太

田晴軒)

(2) 名無きは天地の始めなり、名有るは万物の母なり…これは老子201の「天下の万物は有に生ず、有は無に生ず」の言い換えである。

王弼注

1 凡有皆始於無、2 故未形、3 無名之時則為萬物之始、4 及其

有形、5有名之時、6則長之育之、7亭之毒之、8為其母也、9言道以無形無名始成萬物、10以始以成而不知其所以、11玄之又玄也、

1 fān yǒu jiē shì yú wú, 2 gù wèi xíng, 3 wú míng zhī shí zé wéi wàn wù zhī shǐ, 4 jì qí yǒu xíng, 5 yǒu míng zhī shí, 6 zé zhǎng zhī yù zhī, 7 tíng zhī dú zhī, 8 wéi qí mǔ yě, 9 yán dào yǐ wú xíng wú míng shǐ chéng wàn wù, 10 yǐ shǐ yǐ chéng ér bù zhī qí suǒ yī, 11 xuán zhī yòu xuán yě.

凡そ有は皆無に始まる、故に未だ形せずして名無きの時は則ち万物の始めと為る、其形有りて名有るの時に及べば、則ち之を長し之を育て、之を亭え、之を毒くし、其母と為るなり、言えらく、道は無形無名を以て始まり万物を成し、以て始まり以て成り其所を知らず、玄は又(2)に玄なり、

(1) 之を長し之を育て、之を亭え之を毒くす…老子257・3の引用語  
釈はそこを参照

(2) 又(2)に…さらに 又、猶更也(又、猶更のごときなり) 東山、蓋魯城東之高山、而太山則又高矣(東山、蓋し魯の城東の高山なり、太山は則ち又(2)に高し)(孟子朱注861・2)

## 王弼注訳

有はみな無に始まる。だから形がなく名がない時が万物の始めとなる。形ができ名があるようになると、それを増やし、それを育て、それを整え、それを厚くして、その母となる。道は形がなく名がない所から始まり万物を成すが、どのようにして始まり、

どのようにして成るのかはわからず、玄がさらに玄であると言っている。

こゝは人間の認識できるものに對する興味深い指摘である。物を始めるのは無であり、無は名づけることができない。人間の言葉で表現できるものでなく、人間が認識できるものでない。始まったものを増やし、育て、整え、厚くするのは有のすることである。有は名づけることのできるものだから、人間の言葉で表現できるし、人間が認識することもできる。いわゆる「ひらめき」と言われるものは、無からふと心に湧くものである。なぜそういうことが湧いたのか、その機序はわからない。しかしこのふとした「ひらめき」が大きな力を持つのである。人間の学問はこの「ひらめき」で発達して来た。AI(Artificial Intelligence)が発達し、驚くほど正確な回答をするようになった。AIはAIが学習したことから回答している。AIは言葉で表現されたもの、つまり有から学習している。AIに無からふと生じる「ひらめき」はない。無から生じる「ひらめき」がある所が、人間がAIより優れる所だろう。

## 通し番号3 章内番号3 識別番号1・3

## 本文

## 1 故常無欲以觀其妙、

1 gù cháng wú yù yǐ guān qí miào,

故に常に無は以て其妙を観ることを欲す、

(1) 故に常に無は以て其妙を観ることを欲す、常に有は以て其微を観る

ことを欲す…ここは「常に無欲にして以て其妙を観る、常に有

欲にして以て其微を観る」と読む本が多い。しかしこれは「名

無きは天地の始めなり、名有るは万物の母なり」に続く文であ

る。無と有のことを主題としているのである。無欲、有欲のこ

とでない。ここも無と有のことと考えなければ、つながりが悪

くなる。またどうして「微を観る」のは有欲でなければならな

いのかと思う。ものを見るのは、心を無欲、平静にして見なけ

ればその帰趨はよくわからないはずである。「いつも欲がある立

場に立てば万物が活動するさまざまな結果が見れるだけ」との

訳があるが、多欲であれば、欲で目が濁り、さまざまな結果も

よく見えな。

## 王弼注

1 妙者、2 微之極也、3 萬物始於微而後成、4 始於無而後生、

5 故常無欲空虛、6 可以觀其始物之妙、

1 miào zhě, 2 wēi zhī jù yě, 3 wàn wù shǐ yú wēi ér

hòu chéng, 4 shǐ yú wú ér hòu shēng, 5 gù cháng wú

yù kòng xū, 6 kě yǐ guān qí shǐ wù zhī miào,

妙は、微の極なり、万物は微に始まりて後成る、無に始まりて  
後生ず、故に常に無は空虚にして以て其物を始めるの妙を観るべ  
きを欲す、

## 王弼注訳

妙は微の極である。万物は微に始まりて成り、無に始まりて生  
じる。だから無は常に空虚で、物を始める妙を見ようとする。

## 通し番号4 章内番号4 識別番号1・4

## 本文

## 1 常有欲以觀其微、

1 cháng yǒu yù yǐ guān qí jiǎo,

常に有は以て其微を観ることを欲す、

(1) 微：帰終（王弼注）

## 王弼注

1 微、2 歸終也、3 凡有之為利、4 必以無為用、5 欲之所本、

6 適道而後濟、7 故常有欲可以觀其終物之微也、

1 jiǎo, 2 guī zhōng yě, 3 fán yǒu zhī wéi lì, 4 bì yǐ wú

wéi yòng, 5 yù zhī suǒ běn, 6 shì dào ér hòu jì, 7 gù

cháng yǒu yù kě yǐ guān qí zhōng wù zhī jiào yě,

微、帰終なり、凡そ有の利と為るは、必ず無以て用と為し、本<sup>(2)</sup>

づく所に之<sup>(1)ゆ</sup>を欲すればなり、道に適<sup>かな</sup>いて後に済る、故に常に有は以て其物を終えるの徹<sup>きう</sup>を観るべきを欲するなり、

(1)之<sup>ゆ</sup>…行く 之、往也（之、往なり） 有託其妻子於其友、而

之楚遊者（其妻子を其友に託して、楚に之き遊ぶ者有り）（孟子 92・3）

(2)本づく所に之<sup>ゆ</sup>を欲すればなり、道に適<sup>かな</sup>いて後に済る…定説ではこ  
こは「欲の本づく所は、道に適<sup>かな</sup>いて後に済る」と読む。欲の本  
づく所とは富貴のことだろうから、「道にかなうと富貴が得られ  
る」となってしまう、富貴を得るために道にかなうようにして  
いることになる。これは老子の主張と矛盾する。 欲入所臥  
（臥する所に入ることを欲す）（論衡 別通）という用法があり、

これは人を之にし、臥を本にした形である。

(3)済る…なる 済、成也（済、成なり） 五霸則假借仁義之名、

以求済其貪欲之私耳（五霸は則ち仁義の名を仮借して、以て其  
貪欲の私を済すを求めるのみ）（孟子朱注875・5）

# 王弼注訳

徹は帰し終わる所である。有が利になるのは、みな必ず無で有を用い、基づく所に行こうとするからである。無の道にかなって初めて成すことができる。だから有は常に物が終わる徹<sup>きう</sup>を見ることができるところを望む。

凡そ有の利と為るは、必ず無以て用と為す

これは非常に感銘深い言葉である。私たちは有からものを為しがちである。しかし心や自然の無を経由して為さなければな

らない。こういうデータがあるからと、それを実行する。これは有だけを見て動いているのである。データがあっても無の心でよく考える。無の心で判断して理にあたると判断して始めて実行する。データという有があっても、心という無で用いることにより、有は始めて利をもたらすのである。データという有を心の無で考えることなく用いれば必ず害をもたらす。

テレビはなぜ人に益よりも害をもたらすことが多いのかもこれで説明できる。テレビが表示する動画は有である。たいていの人はその動画の有を心の無でよく考えることなく、その動画の有に影響されて行動する。心の無を用いていないから、テレビに動かされたその行動は理に合わず人に害をもたらす。安倍晋三暗殺事件では、山上被告のいた位置からでは、どのように撃つても安倍晋三氏が受けたような銃創はできない。それだけで山上被告が犯人でないことは明らかである。心の無を用いればテレビの言っていることに理がないのはわかるのである。しかし大半の人はテレビの動画の有のみを見て、心の無を用いていない。それでほとんどの人は山上被告が安倍晋三氏を殺害したと思っている。



通し番号5 章内番号5 識別番号1・5

## 本文

1 此兩者同出而異名、2 同謂之玄、3 玄之又玄、  
4 眾妙之門、

1 cǐ liǎng zhè tóng chū ér yì míng, 2 tóng wèi zhī  
xuán, 3 xuán zhī yòu xuán, 4 zhòng miào zhī mén,

此兩者は同じきに出て名を異にす、同じきは之を玄と謂う、玄  
は又(また)に玄、衆妙の門なり、

(1) 此兩者…王弼は「始」と「母」とする。「名無しは天地の始めなり、  
名有るは万物の母なり」だから、「名無し」と「名有る」のこ  
ともある。「名無し」は「無」にあたり、「名有る」は「有」に  
あたるから、「無」と「有」のことでもある。

(2) 玄…老子5・1、老子5・2の同を指す

(3) 衆妙…多くの妙 衆は「多い」の意味がある。 衆、多也(衆、  
多なり) 殺人之眾、以哀悲泣之(人を殺すことが衆ければ、  
哀悲以て之に泣く 眾…衆の異字体)(老子169・21)

## 王弼注

1 兩者、2 始與母也、3 同出者、4 同出於玄也、5 異名、6 所  
施不可同也、7 在首則謂之始、8 在終則謂之母、9 玄者、10 冥也、  
11 默然無有也、12 始母之所出也、13 不可得而名、14 故不可言、15  
同名曰玄、16 而言謂之玄者、17 取於不可得而謂之然也、18 謂之然  
則不可以定乎一玄而已、19 則是名則失之遠矣、20 故曰、21 玄之又

玄也、22 眾妙皆從同而出、23 故曰眾妙之門也、

1 liǎng zhè, 2 shǐ yǔ mǔ yě, 3 tóng chū zhè, 4 tóng  
chū yú xuán yě, 5 yì míng, 6 suǒ shī bù kě tóng yě,  
7 zài shǒu zé wèi zhī shǐ, 8 zài zhōng zé wèi zhī mǔ,  
9 xuán zhè, 10 míng yě, 11 mò rán wú yǒu yě, 12 shǐ  
mǔ zhī suǒ chū yě, 13 bù kě dé ér míng, 14 gù bù kě  
yán, 15 tóng míng yuē xuán, 16 ér yán wèi zhī xuán  
zhè, 17 qǔ yú bù kě dé ér wèi zhī rán yě, 18 wèi zhī  
rán zé bù kě yǐ dīng hū yī xuán ér yǐ, 19 zé shì míng  
zé shì zhī yuǎn yǐ, 20 gù yuē, 21 xuán zhī yòu xuán yě,  
22 zhòng miào jiē cóng tóng ér chū, 23 gù yuē zhòng  
miào zhī mén yě.

両は、始と母なり、同じく出るは、同じく玄に出るなり、名を  
異にするは、施す所同じくすべからざるなり、首に在れば則ち之  
を始と謂い、終に在れば則ち之を母と謂う、玄は、冥なり、默然  
として有ること無きなり、始母の出る所なり、得て名づくるべか  
らず、故に言うべからず、同じく名づけて玄と曰う、之を玄と謂  
うと言うは、得て之を然りと謂うべからざるに取るなり、之を然  
りと謂えば則ち以て一の玄を定むべからず、則ち是れ名づくれば  
則ち之を失うこと遠し、故に曰く、玄は又(また)に玄なり、衆妙は皆同  
じき従り出ず、故に衆妙の門と曰うなり、

(1) 首…始め 首、始也(首、始なり)(釋名 釋形體) 夫禮者、忠  
信之薄、而亂之首(夫れ礼は、忠信の薄きにして、乱の首なり)  
(老子194・15)

(2) 始母の出る所なり…これを「始は母の出る所なり」と読む本がある。

始と母は玄から出ると老子は言っている。始は母が出る所とは書いてない。

(3) 一…道 一の気 天得一以清（天は一を得て以て清なり）（老子

196頁）ここは「一」を数字の「一」と取るのが定説であ

る。しかし「一つの玄」と読むと玄が複数あることになる。玄は道のことを言っており、道が複数あるはずはないのである。

「一玄」は「一の玄」と読む。

(4) 従り…より から 従、自也（従、自なり） 乃知此心不従外

得（乃ち此の心は外従り得ざるを知る）（孟子朱注42・15）

## 王弼注記

両は始と母である。同じく出るは、同じく玄から出るである。

名を異にするは、施す先を同じにすることができないからである。

施す先が首にあると始と言う。施す先が終わりにあると母と言う。

玄は冥であり、黙々として有ることがなく、始と母が出て来る所

である。名づけることができない。それで言うことができない。

始と母が出て来る所は同じく玄と名づける。玄と言うのは、この

ようであると言うことができない所から名づけている。このよう

であると言うならば、一の玄を定めることができない。名づける

と実体を失い実体から遠ざかることになる。それで玄はさらに玄

であると言う。多くの妙はみな同じものから出て来る。だから衆

妙の門と言う。

## 第二章 章番号2 章内番号1～5 通し番号6～10

### 本文記

天下の人が皆よいこととすると悪いものがある。皆が善とすると不善がある。有があるのは無があるからである。無があるのも有があるからである。難があるのは易があるからである。易があるのも難があるからである。長があるのは短があるからである。短があるのも長があるからである。高があるのは低があるからである。低があるのも高があるからである。こちらの音が和すのはむこうの音があるからである。むこうの音が和すのもこちらの音があるからである。前があるのは後があるからである。後があるのも前があるからである。だから聖人は無為のことにいる。不言の教えを行うと、万物は自然に起こる。道は物を生じるが、生じた物を有することがない。道は為すが、為すことに頼らない。功を成しても功におらない。功におらないようにするから、功が自分からなくなることがない。

通し番号6 章内番号1 識別番号2・1

### 本文

1 天下皆知美之為美、2 斯惡已、3 皆知善之為善、4 斯不善已、5 故有無相生、6 難易相成、7 長短相較、8 高下相傾、9 音聲相和、10 前後相隨、